



聖女として
召喚された俺は
ブーイングされる
どころか男どもに
セックスアピール
されまくりです

その世界は天災が畳みかけ、このまま亡ぶのでは？と人人が絶望するほどの危機に陥っていた。

賢者が調べたところ、天災を起こす原因が判明。

かつて国の王子を、魔女が見初めるも失恋。

恨みつらみを抱えて自死をし、呪いをかけたのか、当時も天災がふりかかったとか。

天災の影響で王子が死亡したことでおさまったらしい。

では、どうして、それから100年経ってから再び呪いが発動したのか。

十六才になる国の王子が、かつて魔女が恋をした王子に顔がそっくりだったから。

隣国の王女との婚約が決まった日を境に天災が起こるようになったので、嫉妬深い魔女の怨念がまだまだのこっているのだろう。

この地に深く染みついたような魔女の呪いは、常人にはどうすることもできず。

「土地を浄化して、呪いを解けるのは異世界の聖女だけです」との賢者の進言を受け、現代日本から召喚されたのが冴えないサラリーマンの俺。

光に包まれている間、聞こえていた歓声が、視界が開けたとたん取りかこむ人々は静まりかえってしまい。

慌てたように、その場からつれだした賢者に、この国の事情を聞かさ

れた。

「いやいや！聖女でしょ！？

俺、男だし、不思議な力なんか持っていないよ！」

「たしかに女ではないが、聖女たる力があるのが、わたしには見えるのだよ」

「といっても、さっきの反応からして皆、俺を見てがっかりしたんじゃない！？

やっぱ、なんかの間違いなんじゃない！？」

「まあ、落ちつきなさい。

すぐに、きみに呪いを解いてもらおうとは思わないから。

一週間くらいは、この地の暮らしに慣れてもらえばいい。

それから力の知識や使い方を教えることにしよう」

とても聖女に見えない俺に対し、賢者は失望感を顔にはださず、なにかと氣をつかつて世話をしてくれたもので。

が、周りはそうはいくまい。

冷やかな目で見られて「あれが聖女だと？」「けっ、頼りなさそうな男だ」と陰口を叩かれるのを覚悟したのだが。

朝、天蓋つきのベッドで起きると、ちようどノック。

「どうぞ」といえば、従者が入室して礼をしてから「お着替えをお持ちしました」と差しだす。

ベッドに座ったまま「あ、自分で着替えるんで」と応じると、着替えを置いてくれたとはいえ、身を乗りだし、開襟しての胸を見せつけるように。

熱っぽい目をむけて、息を荒くしつつ「失礼しました」と退き、去っていった。